

おらおらでひとりいぐも

あいやあ、おらの頭あたまこのごろ、なんぼがおがしくなってきたんでねべが

どうすつべえ、この先ひとりで、何如なんじよにすべがあ

何如なんじよにもかじよにもしかたながつべえ

てしたごとねでは、なにそれぐれ

だいじよぶだ、おめには、おらがついでつから。おめとおらは最後まで一緒だ
がら

あいやあ、そういうおめは誰なのよ

決まってるべだら。おらだば、おめだ。おめだば、おらだ

桃子さんはさつきから堰せきを切ったように身内から湧き上がる東北弁丸出しの声

を聞きながらひとりお茶を啜すすっている。ズズ、ズズ。

桃子さんの脳内にだだ漏もれる話し声とは別に、彼女の背後からかすかに音が響いていた。カシャカシャ、カシャカシャ。

静かな室内になんであれ音は思いの外ほか大きく響く。

音は桃子さんの肩越し、椅子の背もたれのそば近く、ちようと冷蔵庫と食器棚の間辺りから聞こえた。スーパールのビニール袋でも弄いうような音だった。不快な音である。まったくもって耳障みみざわり。

カシャカシャ、カシャカシャ。

なのに少しも動ずる気配がなく、それに合わせて桃子さんはお茶を啜る。

ズズ、ズズ。

音の正体は後ろを振り向かなくても分かっている。ね・ず・み。

去年の秋、十六年一緒に住んだ老犬が身罷みまがってからというものの、屋根裏と言わず、床下と言わずけたたましい。ついに同一平面上に出没往来するところとなり、

今日などはこうして明るいまっ昼間から。先住民の桃子さんを氣遣きづかってか遠慮が
ちではあるが、音を醸かすことに確固たる信念がある、ように聞こえる。部屋の隅
の床の破れ穴から出たり入ったりかじったりつついたり。さすがに桃子さんも
見るほどの勇氣はなくて、が、音だけなら慣れてしまえばけっこう平気なのだっ
た。なにしろ桃子さん以外とんと人の氣配の途絶えたこの家で、音は何であれ貴
重である。最初は迷惑せんぱん千万厭いとうていたが、今となればむしろ音が途絶え部屋中が
しんと静まり返るのを恐れた。

湯ゆ呑み茶碗をひねりながらひと啜り、絡めた指先がじんわり温まる心地よさを
感じながらまたひと啜り、惰性だせいでもうひと啜りとお茶を飲む。何とはなし手を見
る。使い込んだ手である。子供のころ、ばっちゃんの手の甲を撫なでてさすって引っ
張って、おまけにくるんとつねってみたことがある。血管の浮き出た手の甲にへ
ぱり付いた厚い皮はびっくりするほどよく伸びた。少しも痛くないと言った、と
いうか痛くない。骨ばって大ぶりのガサガサした手だった。今その手が目の前に
ある。こんな日が来るとは思わなかった。天井に向けて声が漏れ、目は代わり映ば

えのしない部屋の中を、焦点の定まらないままぐるっとひと泳ぎした。

ここは何もかもが古びてあめ色に煮染まったような部屋である。

庭に面した南面は障子で、その前を壁からもう一方の壁までロープが張られている。そこに半そでのワンピースに冬のコート、クリーニングに出してビニール袋がかけられたままの服、バスタオル、ひよっとしたらさっきまで穿いていたのではと思わせるようなジッパーがだらしなくゆがんだスカート、隣に干し柿が四連ふら下がり、その向こうに荒縄で括られた新巻鮭が半身、バランスを失って風もないのに揺れている。その間を縫って三月の午後の浅い光が届いていた。

西側の壁面には年代ものの衣装箆筒、仏壇、割れたガラス戸を蜘蛛の巣状にテープで補修した食器棚、隣にある冷蔵庫の扉は子供が貼ったシールを半分はがして断念したに違いない。東側に簡易ベッド、大きく張り出した出窓、その上に、コードをぐるぐると鉢巻のように巻いたテレビ、その脇の袋詰めのみかん、飲み止しの一升瓶、空き缶に差した筆記用具、はさみ、糊の類、それにけっこう大きな目の卓上用の鏡などが載っている。ところどころ擦り切れたフローリングの床に

は古本古雑誌が山積み。部屋の北側にシンク、そばに鍋釜茶碗、桃子さんが肘を突いている四人掛けのテーブルは、さつき腕でひと払いして、ポットと急須湯呑み、それにお茶請けの塩せんべいを載せるスペースは、なんとか確保したらしいという態で、あとはひとやまごちやごちやに盛ってある。椅子だって残りの三脚は、もはや荷物を載せる台と化している。

まったく雑然としてはいるが、混沌の中の秩序というか、名より実をとるとい
うか、見栄えはともかく実用一点張りの、なにしろ衣食住すべてこの部屋一つで
用が足せそうで、これはこれで案外使い勝手が良いのかも、と思わせる雰囲気も
ある。まあ、人にもよるが。むろん、この家はこの部屋一つではなくて、隣には
応接間などというけっこうな代物もあるにはあるが、とうの昔に物置と化してい
て、使えるのは二階の寝室とこの部屋だけ。その二階に上がるのも時に面倒なく
らいで、三日に一度は、着古して膝の抜けたジャージの上下のまま、寝巻き、起
き巻きひと巻き、などと叫んで簡易ベッドに潜り込むほどなのである。

桃子さんは相変わらずお茶を啜る。背中でも例の音。